

## カンパラ通信～ナカセロの丘から

### 第9回 映画の中のウガンダ

在外公館勤務者には健康管理休暇という制度があり、この休暇を利用して3月ではありますが桜の花が咲くにはやや早い時期の日本に滞在しておりました。この間、人間ドックを受けました。大腸内視鏡検査というのも日本で初めて経験しました。検診の結果は、重篤な疾病はなく安心したものの、コレステロール値が高く、脂肪肝が認められ尿酸値も高いことから、食事量を減らすこと、特に揚げ物は控えめにするよう指導を受けました。つまり、肥満、飲酒、運動不足に注意するようにとのことでした。4月以降しっかり節制し、健康管理に努めたいと思います。

さて、今回のカンパラ通信では、ウガンダを舞台にした映画の中で私が観た三本をご紹介します。まず、最初に観た映画が「ラストキング・オブ・スコットランド」、次が「ウォー・ダンス」、そして三本目が昨年封切られたばかりの「カトゥウェの女王」です。

「ラストキング・オブ・スコットランド」は、2007年に封切られた英国作品です。ウガンダの独裁者として悪名高いイディ・アミン大統領をウガンダに渡ったばかりの若いスコットランド人医師の目を通して描いたものです。ウガンダは日本ではまだまだ知られた国とは言えません。ウガンダをご存じの日本人の中では、特に年配の方々にとっては極悪非道な独裁者アミンを連想する人がほとんどだと想像します。この映画は、そういったアミン大統領の漠然としたイメージしか知らない多くの人にとって彼の人柄、置かれた時代、そして悲劇に至った経緯というものを知るきっかけになると思います。

アミン大統領は、1966年に当時首相だったミルトン・オボテが大統領となるのを助けてウガンダ軍のトップになり、1971年にはクーデターにより権力を掌握し、1979年に失脚するまで大統領として独裁権力を振るった人物



です。民間機をハイジャックしイスラエル人を人質にしたテロリストがウガンダのエンテベ空港に着陸し、空港の待合室に監禁されていた人質を解放するためイスラエルから秘密裡にやってきた特殊部隊がテロリストを急襲したのもこのアミンが大統領だった1976年のことでした。

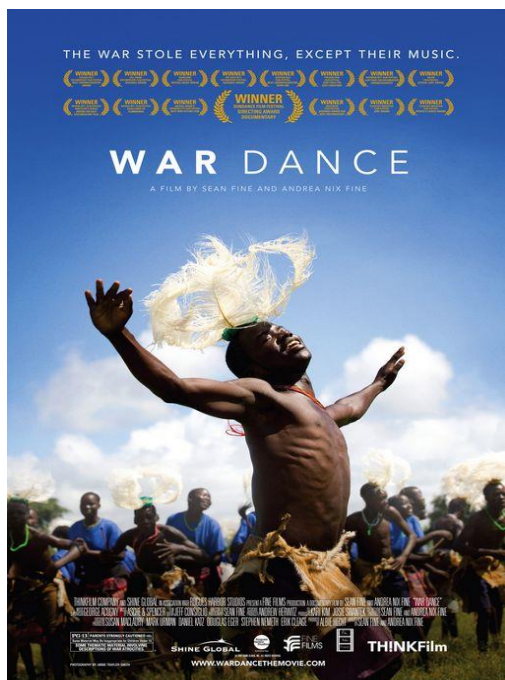
私はこの映画を前回のウガンダ滞在中の2007年にカンパラ市内の映画館で観ましたが、アミン大統領がう



まく描かれていると思いました。物語を楽しみながらウガンダの歴史の一端を学ぶこともでき一石二鳥でした。アミン大統領は、軍人として愛国心が強い純粋な思考の持ち主で多くの人から愛される面がありました。一方国政を担い国を運営するという付随する複雑な因果関係を理解できないまま政策を実行しそれが裏目裏目に出てしまう中で、強烈な猜疑心に憑りつかれて圧政の道に走ってしまったことを残念に思いました。

なお、アミン大統領がなぜ「最後のスコットランド王」という名前で映画のタイトルとなっているかと不思議に思われる人も多いと思います。私もその中の一人でした。ウガンダの旧宗主国は英国ですが、アミン大統領はその英国（と申しますよりイングランドだと思いますが）の支配に抵抗していたスコットラ

ンドに愛着を感じたということです。アミン大統領はスコットランド音楽隊を組織し、彼らにバグパイプを習わせたり、キルトと呼ばれる（日本人の私たちにはスカートに見えますね）スコットランドの民族衣装を身につけさせたりしていたとのことです。真実はわかりませんが、アミン大統領は、スコットランドの王の役割を引き受け、スコットランド人を英国の圧政から解放するとの申し出をしたとの話まで伝わっています。



2本目は「ウォー・ダンス」です。戦争の踊り？怖いタイトルなので、少し怖気づいたのですが、ウガンダの映画だということで勇気をもって恵比寿ガーデンプレイスに向

かいました。時期は2008年12月、私はウガンダでの勤務を前の月11月中旬に終えて日本に戻ってきたばかりでした。どういう経緯から恵比寿ガーデンプレイス内の東京都写真美術館でウガンダの映画を上映している情報を得たのかはもう覚えていないのですが、ウガンダから帰任したばかりでしたので、映画の内容はさておき「行かねばならぬ！」という気持ちでした。

お話は、反政府勢力の跋扈により故郷を離れなければならなかった住民達を保護するためのウガンダ北部の国内避難民キャンプで暮らしながら学校に通う子ども達が音楽と踊りを一所懸命練習し、遂にはウガンダの全国音楽大会に出場するまでを描いた若者映画です。その大会の結果については映画を観てのお楽しみということでここでは書きません。ウガンダは、1962年に英国から独立しましたが、アミン将軍によるクーデターとその失墜を含め1987年まで安定した国造りができないほど混乱した時期が続いて



していました。その混乱に終止符を打ったのが今も大統領の座にあるヨウェリ・カグタ・ムセベニでした。しかし、そのムセベニ大統領もウガンダ北部の反乱勢力を鎮圧するには20年近い年月を要しました。1980年代後半からウガンダ北部を根拠にした反政府勢力の「神の抵抗軍」が跋扈しますが、そのうち民衆の支持が得られない中で地元の少年少女を拉致し男の子は少年兵に仕立てられ、少女たちは性的に搾取されるようになりました。「神の抵抗軍」はウガンダ北部各地を略奪していった結果、170万人にも及ぶ地域住民は国内避難民キャンプに収容されることになりました。映画の主人公たちも、家族が酷い目にあって心的トラウマを抱えた子ども達ばかりです。そういう彼らが自らの伝統的な音楽と踊りを通して未来への展望を切り開いていく物語です。この全国音楽大会は20年以上開催されてきており、今も全国規模でウガンダ全土の中等学校が年に一度踊りと音楽を競い合っています。



最後の3本目が「カトゥエの女王」です。この映画の公開は昨2016年9月ですので、できたてのほやほやです。物語はカンパラの貧民窟であるカトゥエに住む少女のフィオナがチェスのコーチと偶然



出会い、めきめきと才能を発揮し、ついにはロシアで開催された国際大会にまで進むというサクセス・ストーリーです。と同時に、フィオナ自身が父親のいない貧しい家庭の出であることから来る母親との考えの相違などが目立つようになるといった家庭内の葛藤もうまく描かれています。実はこの映画は実話に基づきます。ウガンダ外務省がカンパラの外交団を招待しての試写会があり、私はこの映画を観ました。贅沢なことにその試写会には実物のフィオナとチェスのカテンデ・コーチ、それに映画で彼らの役を演じた俳優も出席していました。

フィオナの実話は既に米国で出版されていて、ディズニーが映画化の権利を取



(実話の主人公と筆者)

得しました。ディズニーならではのうまい作りの映画に仕上がっているなあと感じました。それともうひとつ、この映画の舞台は今の首都カンパラですので、一度カンパラに住んだことのある日本人が観たならきっとその風景を懐かしいと思うこと間違いなしです。ですので、一度カンパラに住んだことのある人には是非この映画を見てほしいと思っております。なお、

この映画によれば、先ほどの全国音楽大会と同じように、学校対抗チェス大会がウガンダでもあるんですね。そしてこれらが1980年代後半に始まり現在まで続いているとは大変驚きました。もうひとつの見どころは、主人公の一人であるチェス・コーチが自らの教え子が学校に通っていないのにも関わらず大会に出場できるよう頑張るところです。

因みに、今回の日本滞在中に日本の将棋と将棋盤を買ってウガンダに持ち帰り、チェス・コーチに贈呈しようと目論んでいます。



最後の最後におまけを一つ。007シリーズで、ダニエル・クレイグ主演の第1作の「カジノ・ロワイヤル」(2006年)を観た人が少ないと思います。私も前回のウガンダ滞在時に観た一人です。その冒頭の方で、先ほど説明した「神の抵抗軍」の一味らしいテロリスト・グループがウガンダ東部のムバレというところの密林の中で007の宿敵のルシッフルと取引をするシーンが出てくるのが強く印象に残

っています。また、モンテネグロのカジノでポーカー・ゲームの中断中にルシッフルがウガンダ人テロリストに襲われるというシーンも出てきます。ただし、ムバレはケニアとの国境に近いそれなりの規模の町であり、密林も近くにはなかったような気がしますので、現実とはかけ離れているシーンとなっています。

皆様、どうぞ映画を通じてウガンダのことをもっと知っていただければと思います。

(以上)